



RCと木が重なって生まれる居場所



RCグリッドに入り込む庭 RCから木へとスケールが移ろい、窓辺に光の余白をつくる



踊り場

重奏の家

RCと木が織りなす住まい

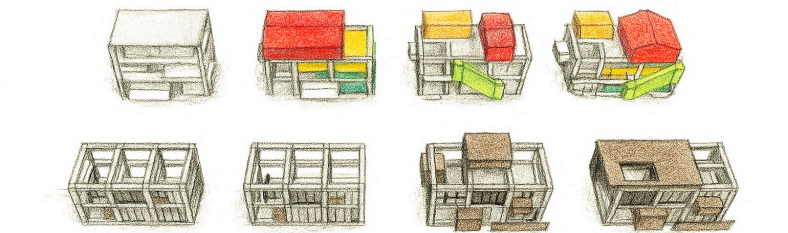
兵庫・甲子園の住宅街に建つ、設計者の両親のための住まいである。建築史を振り返れば、ヴェンチュエリの《母の家》をはじめ、建築家が父母のために住宅を設計した事例は少なくない。それらは親子という私的な計画でありながら、同時に建築への普遍的な問いを持っていた。そうした背景を心に留めつつ、本計画では「異なる時間軸が重なりあう建築の在り方」に焦点を据える。

いつか世代が変わっても、暮らし方を変えながら受け継がれていく、そのような家の姿を思い描き、将来的な用途変更やリノベーションも視野に入れている。変化に応じながらも**記憶を受け継ぐ器**を目指し、RCフレームを骨格とし、その上に木架構を重ねる構成とした。高耐久のRCと柔軟性のある木の特性を両立させ、都市スケールから身体スケールまでを重奏させる。そこに家族の愛用品や暮らしの痕跡が重なり合い、**静かな雑多性**ににじむ。

構造は500mm角のRCグリッドが耐震性を担う自立した骨格となり、木の屋根や外壁をまとう。都市に根を張る確かさと、日々の暮らしに寄り添うしなやかさの両立を図った。



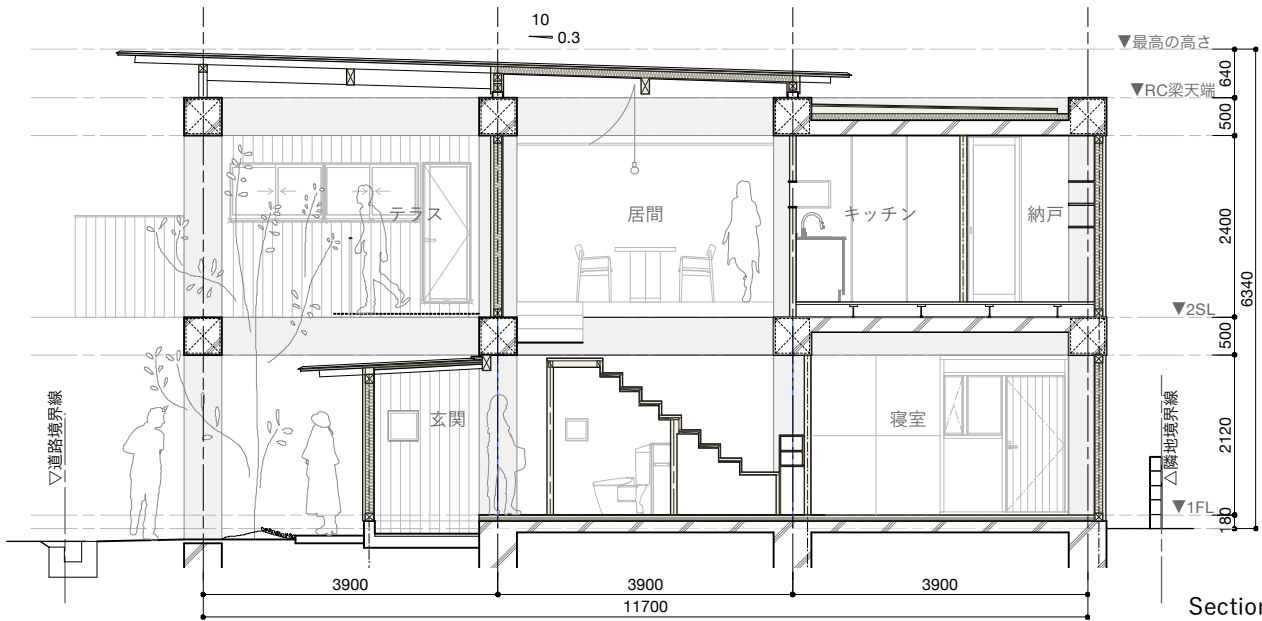
構造模型 将来的な可変性を見据え、開かれたRCフレームに木を重ねるつくりとしている



可能性のスケッチ：かつてこうだったかもしれない、これからこうなるかもしれないRC躯体の土木的なポテンシャルは、人の営みや時間を受け入れるおおらかさがある

時間を重ねて住み継ぐ

スケルトン・インフィルの考え方にに基づき、スケルトンとしてのRCと更新可能なインフィルとしての木架構により、部分的な改修や世代交代にも応えるフレームワークを形成する。光と風は、RCと木架構が出会う接点から招き入れられ、構造そのものが居場所となって暮らしを包み込む。**リノベーション的な新築**であり、あらかじめ「ほどく」ことも視野に入れた。都市を歩いていると、建築の魅力は人々の使い方が積み重なっていくことにあると感じる。ひとつの住宅においても、住まい手の営みが幾重にも重なり合うことで、暮らしの魅力は増し、新しい可能性が生まれていくと考えている。



Section 1/100

木材と施工体制

屋根や外壁の架構には兵庫県産材を使用。

プレカット加工は篠山市の岡本銘木店（三田工場）にて実施し、施工は神戸市の工務店が担当。

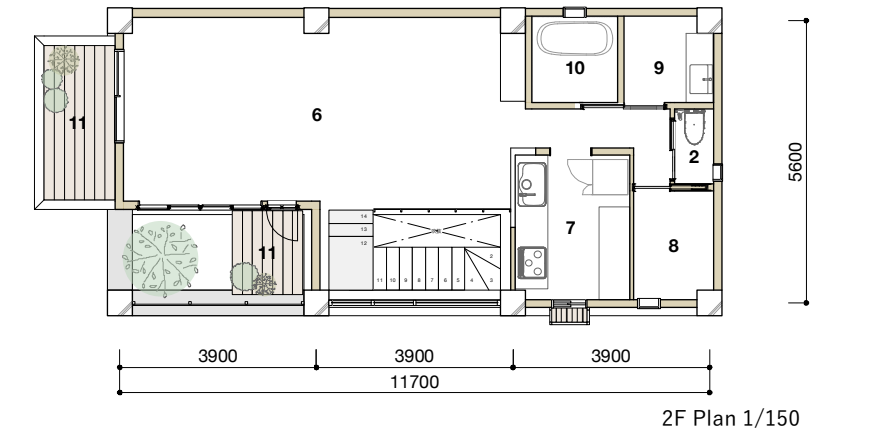
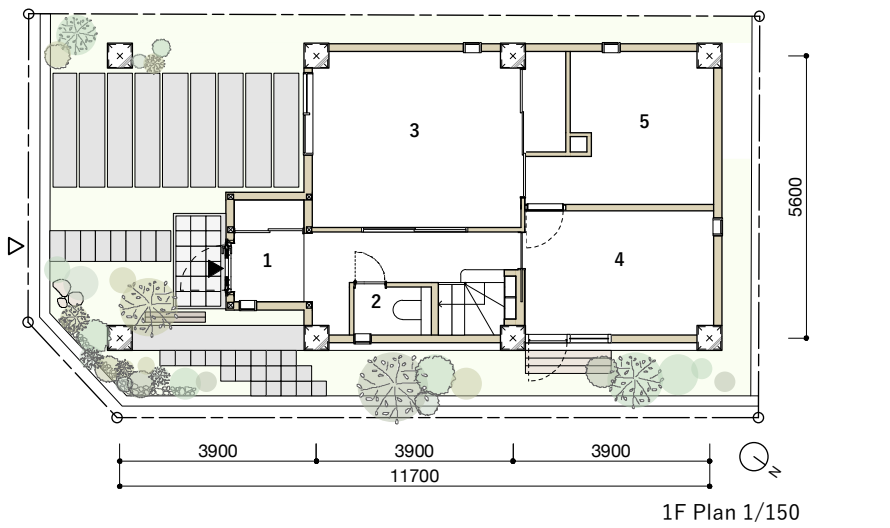
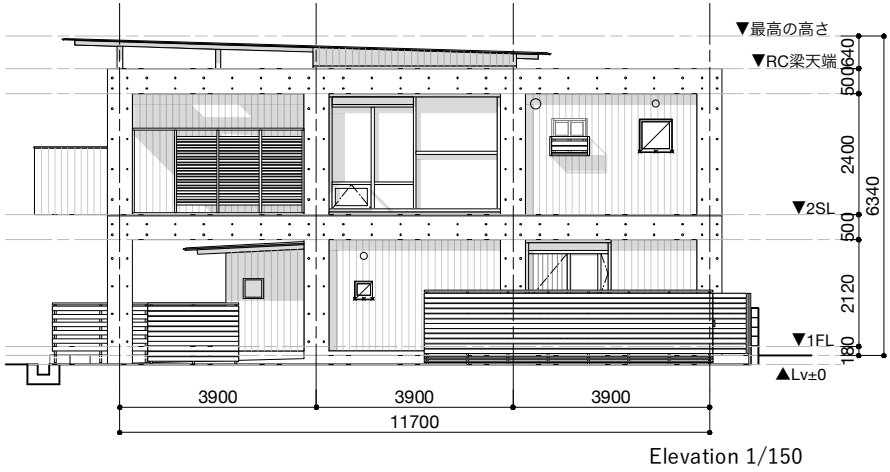
設計から加工・施工まで、県内の一貫体制によって建てられている



重なりにみる暮らしの風景

たとえば都市の高架下に、いつの間にか商店や居場所が生まれていくように、**重なりによる偶然性**を受け入れながら住まいの風景をつくれないうか。

「小さな庭」が街と建築のあいだをつなぎ、その樹木がRCフレームに抱かれるアプローチ。RC柱のピロティをくぐると、「木の素朴な小屋」が迎えるエントランス。吹抜けの玄関ホールが1階と2階の部屋をつなぎ、木のボックス階段や、RCに掛け渡されたスチール階段といった、**素材の変化**がリズムをつくる。RCは「遺跡や廃墟」のような力強さを時折見せ、造作された木からは「手触り」が伝わってくる。そういった**異なる素材と時間が同居するような風景**が、日々の暮らしに重なっていく。



- | | | | |
|------|--------------|---------------|-------------|
| RC | 1 Entrance | 5 Store room | 9 Wash room |
| Wood | 2 Rest room | 6 Living room | 10 Bath |
| | 3 Guest room | 7 Kitchen | 11 Deck |
| | 4 Bed room | 8 Store room | |

下) 街と暮らしのあいだのピロティと庭

上) 異なる素材の響き合いが、住まいに深みとあたたかみを生み出す

